JLTA Newsletter
日本言語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 17　　発行代表者：大友 賢二　　2003 年 (平成 15 年) 2 月 17 日発行

発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758　TEL 026-275-1964　FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp　URL: http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

評価元年

浪田克之介　(*北海道大学*)

今年も入学試験のシーズンとなった。受験者数が過去最多となった大学入試センター試験が終了し、各大学や高校などの試験が続くのは例年通りだが、大きく異なる点は高校入試の調査書に絶対評価が使用されることだ。たまたま一つのサーチ・エンジンで「絶対評価」を検索してみると、なんと 16,800 件もの情報がインターネット上に掲載されている。そのほとんどは新聞や雑誌などの記事で、ここ 1 年以内のもののようだ。このことは、昨年 4 月から施行された新学習指導要領に基づく評価方法の変化に社会がいかに戸惑っているかを示すものでもある。むろん、すでにおなじみの「偏差値」や近年使われている「観点別学習評価」など一般にはわかりづらい概念はこれまでもあったが、「絶対評価」はいっそう一般人や関係者の理解を困難なものにしている。

周知のように、文部科学省は昨年 7 月、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を発表した。その中には、高校や大学の入試における外部試験結果の活用促進、また各大学の個別試験における外国語試験の改善・充実などが提示されている。加えて、平成 15 年度から 5 ヶ年計画で、各都道府県において中学・高校の全英語教員 6 万人を対象に集中的に研修を実施するという。これら英語教員に求められる英語力としては、英検準 1 級、TOEFL は 550 点、そして TOEIC では 730 点を目標とすることも示された。予想される研修内容が、教員の英語力養成のみでないことは当然であるが、これまで実施されてきた各種研修会にもまして、ぜひとも評価が本格的に取り上げられてほしいと思う。

文部科学省は新年度を目前に、関連学会の協力のもと実施計画を進めているようだが、私どものような専門学会が各地での研修に協力できる体制が必要であることはいうまでもない。

第16回日本言語テスト学会研究例会報告

第16回日本言語テスト学会研究例会は愛知学院大学の学院会館で開催された。発表題目と発表者名は以下の通りであった。

発表1　Sumie Matsuno (*Aichi Prefectural University*)
Inspecting a Test Based on the Classical Theory and the Generalizability Theory Analyses
発表2　風斗博之　(*東北学院大学*)
TOEICスコアに基づいて語彙力を評価するWEB上の英単語テスト開発について
発表3　土平泰子（*茨城大学*)
Test-wisenessと英語リスニングテスト得点の関係
発表4　法月　健(*静岡産業大学*)
公正なテスト作問と評価のあり方について

参加者の一人が述べた感想が研究例会の全てを物語ると思うので紹介する。「200名ぐらいの参加者でも十分魅了できる内容を含んでいたよね。」多忙な方が多かったのか、参加者は10数名と少なかったが、参加者全員が積極性を示してくれ、質疑応答の時間には白熱した議論が展開された。例会終了後は懇親会が開催され言語テストとそれに関わる人々の話題で盛り上がった。「言語テスト研究も楽しい、そしてそれに関わる人々も魅力的なひとが多い」と感じられた例会であった。

(報告者：伊藤彰浩　*愛知学院大学*)

第24回 Language Testing Research Colloquium(LTRC) 報告

第 24 回 Language Testing Research Colloquium が 12 月 12 日から 15 日まで香港工科大学で開催された。Language Testing in Global Context をテーマにした大会に 130 名以上が参加した。研究発表数は Paper が 17 件、シンポジウムが 3 件、Poster が 16 件、Research network が 17 件であった。発表数が多いため、ここでは日本の言語テスト研究に参考になるであろうことを中心に、全般的な印象を述べるに留め、個々の発表についての報告は行わない事にする。また報告者は都合で最終日の発表には参加しなかった。

今回の LTRC に参加して感じたことの第一は、シンポジウムのテーマにもあったように、コンピュータ利用テストの妥当性・信頼性の基礎研究が、かなりのスピードで進められていることである。TOEFL が CBT になったことは衆知のことであるが、コンピュータを利用する事により、リスニング・リーディングにおいては四者択一以外の解答方法が可能になること（例えば Drag-Drop や Short Answer)、またライティングやスピーキングを直接コンピュータに評価させることが可能になると考えられる。CBT のプラットフォームの作成は技術者の仕事になるが、テスト研究者は、これらの新たな問題提示方法・解答方法・採点方法が、従来型テストと異なる英語能力を測定する事にならないか、また、信頼性がどのように変化するかなどを調べておかなければならない。これらの研究は UCLA を中心に行われている。

第二に、言語テストのデータ分析に、いよいよ本格的に差異項目機能分析・一般化可能性理論などが用いられるようになったことである。これらの統計手法を用いた発表が増加している背景には、アメリカやオーストラリアなどにおけるテスト環境や教育環境があると思われる。差異項目機能分析は、そもそも受験者の文化的なバイアスを特定する目的で用いられ、一般化可能性理論は、ライティング・スピーキングの評価について、受験者・採点者・タスクを原因とした誤差（つまり信頼性）の分析に用いられるが、このような統計手法の必要性を支えるのは、アメリカやオーストラリアが多文化・多言語社会であり、テスト結果に影響すると考えられる変数が多数多様である事、また、公平でないテストが実施されれば、場合によってはテスト作成者の法的責任が追及される厳しい社会であることが反映しているように思う。また、ライティング・スピーキングという分野は、よく採点者の主観的判断による誤差が危惧されるが、これらの分野に果敢に挑戦するのは、「実社会で要求されるパーフォーマンスの能力は、パー

フォーマンス・テストを通してのみ知りえる」という視点があってこその試みであろう。わが国においても、差異項目機能分析・一般化可能性理論を利用した研究例はあるが、今後のテスト研究の動向を考えると、これらの分析方法についての理解を高めておく事は、我々に与えられた急務であると考える。

第三に、統計的な分析が進む一方、質的な研究も重要視される傾向にある。受験者や問題作成者への質問紙法による質的データの収集が積極的に行われているが、これらの質的データは、量的分析を前提とした「強くそう思う」～「全くそのように思わない」の Likert 法の解答ではなく、「生の声」を分析している。テスト研究者は、高度な統計手法を用いても、研究の目的を見失わないよう、自らを戒めなければならない。受験者の声を無視した数字列の分析だけでは、それがいかに統計的に有意であり、テスト研究という「たこ壺」の世界では「立派な研究」と称されても、我々に寄せられる世の中の期待に応えることにはならない。

(報告者　木村真治　*関西学院大学*)

第 13 回 AILA（国際応用言語学会）報告

2002 年 12 月 16 日（月）から 21 まで、第 13 回 AILA（国際応用言語学会）が Singapore にて行われた。テーマは Applied Linguistics in the 21st Century: Opportunities for Innovation and Creativity。総数 900 余りの発表、65 のシンポジウムという大きな大会であった。以下にテスト関係の発表をリストし、報告にかえる。（順不同）

[Paper presentations]

Elana Shohamy. Assessing achievement of immigrant students in Hebrew and Math in Israel: results and issue.

Sharah Toogood, Richard Pemberton, Susanna Ho & Elza Tsang. Assessing SALL.

Kanzaki Kazuo. Prosodic factors for the assessment of EFL learners' reading proficiency.

Marie Myers. Computer-assisted second language assessment in the new economy.

Katagiri Kazuhiko. Inferring Japanese learners' English ability by way of measuring their vocabulary size.

Lee Yong-Won. Automatic scoring of L2 essays: Should it differ from the L1 case?

Wu Shinian. Non-native, near-native, native-like, and native: definitions, perceptions, and expectations.

Jeff Johnson. Investigating bias in essay writings.

Alan Davies. Language testing: what is the criterion?

Hossein Farhady. The washback effect of frequent quizzes on reading comprehension. (cancelled.)

Alister Cumming. Should they correspond? Goals for ESL writing improvement among adult learners and their instructors.

Kobayashi Hiromi & Ikuta Yuko. Pedagogical assessment of an e-learning curriculum.

M. Hassan Tahririan . Iranian college EFL learners' achievement and their language learning strategies.

Oshima Makoto, Shoji Nobuyuki & Andrew Jones. Some distinctive features of TOEIC.

Ito Tae, Kawaguchi Keiko & Ohta Ritsuko. A study of a relationship between TOEIC scores and functional job performance.

Hossein Farhady. The validity and scalability of the components of reading comprehension ability.

Thomas Robb. Effective CALL in a 'required self-assessment' mode

Lindsay Brooks. Oral proficiency testing: do test-takers like to interact in pairs or not?

Bernadette Stoneman. The impact of a high-stakes English language exit test on language learners and their learning.

Tsubaki Mayumi. The self-assessment of vocabulary knowledge: partial replication.

Amy D Yamashiro. Examining the construct

validity of an academic English video-listening placement test.

V. C. Gheervarghese. Correlation between language competence at entry level and performance in academic subjects.

Paul Meara, G. c. Jacobs & C. Rodgers. Factors affecting the standardization of translation examinations.

Charles Stansfield & William Hewitta, A. A screening test for the certification of court interpreters.

Dongil Shin. Qualitative explanations for the appropriacy of using RASCH techniques in L2 testing.

[Symposia]

Tim McNamara. Assessment research and school-based language learning: the neglected interface.

Janna Fox. Interdisciplinary research approaches to language testing and learning.

Geoff Brindley. Investigating language teachers' assessment practices.

ついでながら、筆者が発表したのは、Janna Fox と Geoff Brindley のシンポジウム。タイトルは、

Yoshinori Watanabe. The importance of the role of motivation in understanding washback to the learner.

---. Three theories of motivation and washback to the learner.

以上、筆者が聞いたのは限られているのでキャンセルもあるかもしれない。また、発表したのにリストされていないという参加者は JLTA 事務局までご一報のほどを。

（報告者 渡部良典　*秋田大学*）

以下、３つの発表を事例報告する。

Kanzaki Kazuo (*Osaka Electro-Communications*)

"Prosodic factors for the assessment of EFL learners reading proficiency."

音読における音声面での特徴・能力を評価することによって、リーディング能力の推定に資することができるかどうかを検証する研究である。

まず、被験者として、日本人大学英語教師 5 名（上級英語学習者）5 名と日本人大学生（下級英語学習者）5 名が，英語の文章と日本語の文章を音読した。次に、その音読した音声に対して、speech rates, pitch ranges, pauses の 3 つの観点から分析がなされた。

結果は、大学生群に比べて英語教師群のほうが、(1) 音読のスピードがずっと速く、また (2) 間（ポーズ）の数が少なく、かつ適切なところに適切な長さの間がみられた。また、(3) ピッチの幅に関しては、英語教師群は日本語を読む時に比べて英語を読む時のほうが幅の広いピッチを使用するのに対し、大学生群は日本語を読む時に比べて英語を読む時のほうがピッチの幅が狭かった。

以上から、音読における音声面 (speech rates, pitch ranges, pauses) を評価することによって，リーディング能力の推定に役立つものと結論付けられた。

（報告者： 片桐一彦　*麗澤大学*）

Ito Tae, Kawaguchi Keiko, & Ohta Ritsuko. (*Toyota Technological Institute, Shibaura Institute of Technology, & Keio University at Shonan Fujisawa*)

"A study of a relationship between TOEIC scores and functional job performance."

多くの会社や大学等で採用され大人数が受験する TOEIC は、英語を使った実際の仕事の出来具合と相関関係があるのかどうかを検証する研究である。また、この研究を行なうにあたって、英語を使った仕事の様々な場面を表わす一覧表（checklist）を作成することが 2 つ目の目的である。

まず、材料として、65 の can-do statements が作成された。次に、TOEIC スコアを持つ会社員 8,386 人に、その 65 の can-do statements に対してそれぞれ 5 段階評価で自己評価してもらった。

その後、得られたデータの分析をおこなう際に、まず、この 65 の can-do statements 項目を、Listening, Speaking, Reading, Writing, Interactive Communication の 5 つの種類に分類した[分類方法 1]。一方で、どういう状況下での仕事かという観点から 7 種類(A: meeting a guest, B: doing a routine task, ... G: going on a business trip) への分類も行なった[分類方法 2]。そうやって得られた「分類方法 1 における 5 つの変数」「分類方法 2 における 7 つの変数」と「TOEIC スコア」との相関係数を求めた。

結果は、12 個あるどの変数も r= 0.63-0.70 (p.< .01)の相関係数が得られた。また、「分類方法 1 における 5 つの変数」「分類方法 2 における 7 つの変数」それぞれの値を縦軸に、「TOEIC スコア」を横軸にした図では、増加関数を表わす緩やかな曲線が示された。

その他の調査 (self-perceived difficulty に関して) も行なわれた。

以上から、TOEIC スコアは、英語を使った各種の仕事の出来具合 (自己評価) と相関関係があると結論付けられた。

(報告者： 片桐一彦　*麗澤大学*)

Kkatagiri, Kazuhiko (*Reitaku University*) "Inferring Japanese Learners' English Ability by way of Measuring Their Vocabulary Size II"

The purposes of the study were (1) to examine whether English ability of Japanese junior high school 2nd year students can approximately be inferred by way of measuring vocabulary size, and (2) using factor analysis of STEP 5th grade test, to investigate the biggest component in English ability, predicting that the biggest component relates to vocabulary knowledge.

One hundred fifty-five Japanese junior high school 2nd year students, who had learned English for one year and three months, took Mochizuki's (1998) Vocabulary Size Test (VST) and STEP 5th grade test. Correlation coefficient was calculated between estimated vocabulary size scores and the STEP scores, and then factor analysis was conducted, using the scores of each seven part in the STEP (seven variables) and the vocabulary size scores (one variable).

The results showed that (1) the VST highly correlated with the STEP (r=0.70, p.<.001) and that (2) only one factor was extracted through the factor analysis and its factor loading on vocabulary knowledge was 0.72.

It was concluded that (1) considering the results of my previous study, English ability of Japanese junior high school students may be able to be approximately inferred by way of measuring vocabulary size and that (2) the biggest component in their English ability may be something that relates to vocabulary knowledge.

(自己報告： 片桐一彦　*麗澤大学*)

Information

2003 年度 LTRC についてのお知らせ

We are very happy to announce details of the LTRC 2003, which will be held at the University of Reading, July 22 to 25 2003. For details about the conference, including registration and the call for papers please visit out website at:

http://www.rdg.ac.uk/AcaDepts/ll/teru/ltrc2003/homepage.htm.

Right now, only the basic pages have been uploaded. Over the coming months the site will grow as more information is added.

Organizing Committee
Barry O'Sullivan (*The University of Reading*)
Pauline Rea-Dickins (*The University of Bristol*)
Jayanti Banerjee (*Lancaster University*)

日本語教育学会より、講演会のご案内

日本語教育学会は，文化庁の招きで訪日する米国の著名な言語教育学者レベッカ・オックスフォード教授（メリーランド大学）の講演会を，東京および名古屋で以下のとおり開催します。

お誘い合わせのうえ，ご参加くださいますようご案内申し上げます。

[東京]
日時：2003年3月19日（水）
午後2時～4時30分（質疑応答を含む）
場所：昭和女子大学
講演テーマ：
"Current Issues in Language Learning Research and Practice: What Influences Students' Achievement?"
参加料（資料代を含む）：
一般（学会員を含む）3,000円、学生2,000円
[名古屋]
日時：2003年3月20日（木）
午後2時～5時（質疑応答を含む）
場所：南山大学
講演テーマ：
"The Role of Styles, Strategies, and Motivation in the Learning of a Second or Foreign Language"
参加料（資料代を含む）：
一般（学会員を含む）2,000円、学生1,000円
申し込み方法：下記項目を記入し，メール，FAXでお申し込み下さい。

氏名，連絡先住所，電話番号／FAX番号，e-mail，職業・所属先
宛先：メールの場合：office@nkg.or.jp（メールタイトルを「東京講演(3月19日)申込」としてください。）
FAXの場合：03-5216-7552
〔案内ホームページ〕
http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/news/news-20030319oxford.htm

日本英語検定協会第16回「英検」研究助成募集のお知らせ

日本英語検定協会の研究助成制度は、実用英語の一層の普及・発展と英語能力検定試験の質的向上を目的に、1987年に発足しました。小学校・中学校・高等学校の先生方を対象として、英語能力テストおよび英語教育に関する研究企画を募集し、優秀な企画に対して助成金を交付して、10か月間の研究後その結果を公表します。

これまでに168点が助成対象テーマとして選考され、研究成果は教育現場をはじめ広く関係者のあいだで活用されています。第16回を迎える今回から、応募資格を「大学院在籍者」にまで拡大することになりました。

独創的な企画、実用的で有用な企画をお持ちの方からの、多数のご応募をお待ちしています。

[応募資格者]
小学校・中学校・高等学校で英語教育に関わりを持つ教員。
大学院在籍者で英語教育に関わる研究を専攻する者。
[応募手続き]
応募方法
(1) 所定の「研究助成申請書」を提出する。申請書の希望者は、氏名・住所・電話番号を明記して、はがき、ファックスまたはEメールで請求する。請求期間は、2003年1月中旬から4月初旬まで。
(2) 申請書に記入する内容は、研究などに関するテーマ・目的・方法などをまとめた企画書

（1,800字～2,000字前後）、予算内訳、申請者の略歴などで、日本語で記入する。

応募締切日　2003年4月15日（火）

応募・問合せ先
〒162－8055　東京都新宿区矢来町1　（財）日本英語検定協会 制作部 「研究助成」担当
TEL. 03（3266）6448, FAX. 03（3266）6590
E-mail:kouhou@eiken.or.jp

第４回 JLTA 言語テストワークショップ

日本言語テスト学会 (The Japan Language Testing Association: JLTA) では、言語教育関係者、特に中学校・高等学校・大学の英語科教員を対象とした、言語テストの理論と実践に関する基礎的なワークショップを下記の要項にて開催いたします。ふるってご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

記

開催日時：平成 15 年 3 月 8 日 (土)
会場：沖縄国際大学　5 号館 106 教室
〒901-2701
沖縄県宜野湾市宜野湾 2 丁目 6 番 6 号
TEL 098-892-1111 (代表)
URL: http://www.okiu.ac.jp/
主催：日本言語テスト学会（JLTA）
(The Japan Language Testing Association)
後援：沖縄県教育委員会 (申請中)
日程・内容：
10 時　開会
司会
大城賢 (*沖縄国際大学*)
村田典枝 (*沖縄キリスト教短期大学*)
挨拶
木下正義 (*福岡国際大学*)
10 時 10 分～10 時 50 分
言語テストの基礎
大友賢二 (*常磐大学・筑波大学名誉教授*)
11 時～12 時 30 分
テストのデザインと項目作成
Randy Thrasher (*沖縄キリスト教短期大学・国際基督教大学名誉教授*)
中村優治 (*東京経済大学*)
12 時 30 分～13 時 30 分
昼食
13 時 30 分～15 時
言語テストデータ分析
中村洋一 (*常磐大学*)
15 時～15 時 15 分
閉会挨拶　Randy Thrasher

参加費 (資料費を含む)：2,000 円
事前申し込み不要、参加費の支払は当日の受付にて。

問い合わせ先：
中村 洋一
日本言語テスト学会事務局
〒389-0813　長野県埴科郡戸倉町芝原　758
TEL 026-275-1964, FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp
URL:　http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html

国立国語研究所ことばフォーラム(第14回)
ビジネスや留学にいきる言葉の力とは？

日時：　2003 年　3 月 15 日
午後 1 時～4 時 (予定)
会場：　中目黒 GT プラザホール
目黒区上目黒　2-1-1　（東急東横線　中目黒駅より　徒歩 1 分）
入場　無料
本フォーラムでは、ビジネス・留学のために広く行われている様々なことばのテストを通じて、ことばの力とは何かを考えます。

プログラム
＜講演＞　「言葉の力をとらえる方法」
菅井　英明 (*国立国語研究所*)
「日本人の文章力」（日本語文章能力検定）
樺島　忠夫 (*大阪府立大学名誉教授*)

「外国人の日本語力」（日本留学を中心に）
西原　鈴子 (*東京女子大学*)
「韓国ビジネスマンの日本語力」（韓国 JPT）
李　明姫 (*新羅大学校・東京学芸大学*)
「日本人の英語力」（TOEFL）
Randy Thrasher (*国際基督教大学名誉教授・沖縄キリスト教短期大学*)
「ヨーロッパの言語テスト」
杉本　明子 (*国立国語研究所*)
＜質疑・応答＞

申し込み方法：
参加を希望される方は、メール、ファックスまたは官製はがきで申し込みください。
宛先：国立国語研究所 ことばフォーラム係
メール：forum@kokken.go.jp
ファックス：03-5993-7663
はがき宛先：
〒115-8620　東京都北区西が丘 3-9-14
締切りは 3 月 10 日（月）必着です。
会場には、手話通訳が付きます。盲導犬も入場可です。

@@

事務局よりお知らせ

◆ 転勤、転居等、JLTA の名簿記載事項に変更が必要な場合は、速やかに、事務局までご連絡下さい。また、銀行引き落としによる会費納入を利用している会員で、吸収・合併などにより、銀行名、支店名、口座番号等が変更になった場合は、必ず事務局まで、その旨をお知らせ下さい。銀行引き落としが不可になった場合、その年度のみ、郵便振込による納入をお願いしています。ご理解の上、ご協力をお願いいたします。

◆ 住所、所属、メールアドレスなどの変更があった会員は事務局までご連絡ください。

◆ JLTA の活動に対するご意見やご要望、Newsletter 等への掲載希望記事など事務局までご連絡ください。

◆ The JLTA office would be grateful if you could update us on your recent achievements relevant to the field of language testing and evaluation. Any information on your presentations, publications, awards, and so forth would be greatly appreciated. The relevance of the information will be evaluated by the office and given in the newsletter in due course.

会員の皆様の当該分野での近況をお伝えください。テスト・評価関係本を出版した、論文を発表した、賞を受けた、博士論文を提出した、など。随時報告してゆきたいと考えております。

日本言語テスト学会事務局
〒389-0813　長野県埴科郡戸倉町芝原　758
TEL 026-275-1964　　FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp
URL:http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html